



私は高校3年生の時に献身の思いを与えられ、西南神学部入学を決めました。

牧師家庭で生まれた私にとって福音とは至極普遍的で、すべての人間に行き届いているものという認識が今まではありませんでした。しかし、高校生時代に与えられた出会いを通して人間が福音を渴望している現状、真の平和が欠如しているこの地上の状況を認識し、働き手がないことを知るに至りました。祈りの中で主と対話したのち、私に使命が与えられたという確信を持って入学しました。入学してからは発見と新たな出会いの連続です。私が知っていた信仰、聖書、キリストとはどんなに狭い理解だったかを思い知らされました。その発見は時として痛みを伴うものですが、しかし何にも代えがたい価値を持ちます。

私は現在キリスト者が平和形成へとどのように向き合っていくのかを真剣に学び、考えていきたいと思っています。ミャンマーの内戦、ウクライナロシア戦争をはじめとした世界の情勢が大変危機感を持っております。日本もいずれこの大きなうねりの中に巻き込まれてもおかしくはないと考えています。私にはこの難しい状況がイスラエルの地を生き、ローマ人、ユダヤ人との狭間で福音を宣べ伝えたイエスキリストの生きた状況と重なって見えます。これからの学びにおいてしっかりと聖書によって立ち、キリストの平和を真に宣べ伝えるために引き続き、学び、仕えていきたいと思えます。皆様のご支援、お祈りに感謝申し上げます。日本の神学生が大変豊かな環境で学ぶことができていることを覚えます。この恵みの源である神様に栄光を帰しつつ、ご支援くださる皆様に主の力が留まることを切に願います。

全国壮年会連合 NEWS

第125号
2023/2/20
発行

日本バプテスト連盟
全国壮年会連合
発行人：山田誠一
編集人：三室一朗
Topics Password ▶ sorengo

神学校献金(神学生奨学金献金) 振替00150-7-669605 日本バプテスト連盟全国壮年会連合事務局

「この時代に適した策を講じる」

宣教研究所所長 朴忠郁



近年、話題になっている言葉の一つとして「SBNR (Spiritual But Not Religious、宗教的ではないが霊的である)」という用語があります。それは、2000年にスウェン・アーランドソンという米国のルター派牧師が同タイトルの本を出版して以来、宗教・精神事情ならびに宗教風土を表わすもので、その書名の頭文字の省略語が人口に膾炙するようになりました。SBNRと関連して、2017年の調査(Pew Research Center)では、全米のSBNR人口は4人に1人(27%)といわれ、5年間8%が増加しています。キリスト教会または宗教組織に所属していない人が近年顕著に増加しているのです。そのSBNRが注目されるのは、単なる宗教に限らず、社会全体としての動向を反映した現象であるからです。日本ではSBNRのような統計はないものの、5年ごとに行われる「日本人の国民性調査」(2018年実施)を参考にすると、「宗教を信じるか」(信じていない74%)と

「宗教心は大切か」(大切57%)という項目から日本におけるSBNRの動向を垣間見ることができると考えられます。

昨今、神学校ごとに入学者の減少という顕著な傾向が見られる中、いわゆる「献身者」を募るための様々な打開策を模索しています。もちろん諸教会への協力の呼びかけや制度的補完など、内部的な見直しも大切であると思われませんが、私たちが何より念頭に置かなければならないのは、現代日本社会という宗教的土壌です。それは「献身者」が掘り起こされる現場であるのみならず、これから福音宣教の対象になる人たちが置かれている状況でもあるからです。いわば新自由主義や個人主義の風潮が強まる中、各々の個人は自分の霊的または精神的成長のために組織化された宗教教団に所属し、献身と忠誠を求められる集団や群れの価値に追従するより、自分だけの価値観や道徳的基準を設けることをより大切にすると言えるでしょう。「献身者」を募るに当たり、そのような宗教的土壌を勘案して、良し悪しを議論し判断するより、この時代に適した策を講じていくことが求められるのです。

「第3回奨学金委員会(1/28) Zoomにて開催報告」

奨学金委員長 北村慎二

報告事項

西南学院神学部報告

奨学金会計・神学校献金・奨学金返還の状況

審議事項

- (1) 2022年度返還免除者について
- (2) 2022年度奨学金償却者について
- (3) 2022年度奨学金支給額について
- (4) 2023年度奨学金予定額について
- (5) 2023年度の神学生面談について

(6) 2024年度奨学金申請様式について
ディスカッション

リカレント教育について

奨学金会計基本金について

諸教会の熱い祈りと尊い献金によって奨学金会計が支えられていることを感謝しつつ、さらに充実した奨学金制度となりますことを願っております。

「第3回役員会(2/4) 報告」

事務局長 三室日朗

コロナの影響で対面での会議を開くことができないまま、今年度も2ヶ月を切った中で、定例の活動報告を受け、新年度に向けての課題を話し合いました。壮年大会東京大会での総会の持ち方、壮年会役員及び奨学金委員長の選挙に向けた準備、今後に向けて必要となる規約等の改正、等です。また新しい「伝道者養成の基本理念」は今月の連盟総会で審議・承認されると思われませんが、この理念に則った次の展開をどう考えていくかや、理事会と協議を続けている奨学金会計の『基本金』についての考え方について等を議論しました。3月の奨学金委員会との合同役員会、4月上旬の役員会につなげて成案としていくこととなります。

今回より「壮年連合ニュース」に新しいシリーズを開始しました。これから神学校に行くことを考え

ておられる青少年や壮年の方々への参考になるようにと願いつつ、伝道活動の第一線に立っておられる牧師の方々に、「あなたは神様よりどのような召命を受けられて今日に至っておられるのですか?」と召命に関する証しを掲載していきます。ベテランと言われる先生方やまだ第一線に立って日の浅い牧師の方々の生の声をお届けしていきますのでご期待ください。

この他にもそれぞれの地方連合壮年会の働きとか、「こういったことを掲載できないか?」とか良いアイデアがあれば事務局までお知らせください。壮年会連合ニュースが各教会と全国壮年会連合を結び情報交換の場になるように役員会で検討して行きます。

2023年1月現在の神学生奨学金献金・会費実績および対前年度比較

地方連合名	神学生奨学金献金					連合会費				
	2023/1実績		前年同月		対前年額	2023/1実績		前年同月		対前年額
	金額	教会	金額	教会		金額	教会数	金額	教会	
北海道	259,165	9	411,210	8	-152,045	68,000	6	72,000	5	-4,000
東北	431,100	13	346,200	11	84,900	52,000	7	110,000	11	-58,000
北関東	904,156	15	838,655	13	65,501	175,000	9	108,000	8	67,000
東京	1,639,519	20	1,376,125	18	263,394	270,000	11	240,000	9	30,000
神奈川	819,878	10	1,156,350	14	-336,472	122,000	4	226,000	7	-104,000
西関東	262,214	6	276,091	5	-13,877	61,000	5	55,000	5	6,000
中部	539,707	10	587,500	9	-47,793	148,000	11	144,000	11	4,000
関西	463,320	13	409,700	14	53,620	74,000	5	74,000	6	0
中四国	736,350	19	675,830	17	60,520	88,000	8	98,000	9	-10,000
北九州	407,345	13	461,365	12	-54,020	68,000	6	82,000	6	-14,000
福岡	1,226,474	25	1,434,752	23	-208,278	188,000	13	247,500	14	-59,500
西九州	186,000	6	276,800	8	-90,800	6,000	1	50,000	4	-44,000
南九州	405,900	13	435,618	12	-29,718	103,000	13	102,000	9	1,000
地方連合合計	8,281,128	172	8,686,196	164	-405,068	1,423,000	99	1,608,500	104	-185,500
個人団体等	499,801	0	469,731	0	30,070	-	-	-	-	-
総計	8,780,929	172	9,155,927	164	-374,998	1,423,000	99	1,608,500	104	-185,500

◎1月末現在、教会・伝道所の地方連合合計は前年比で神学校献金は▲405,068円(95.3%)です。連合会費は、前年比▲185,500円。教会数では、▲5。会費納入人数は▲93名です。尚、期末に当たり、3月31日までに「ゆうちょ銀行」の所定口座に振り込まれたものを計上することとなります。期限の厳守にもご協力いただきたく、あわせてお願い申し上げます。



日本バプテスト連盟全国壮年会連合
〒336-0017 さいたま市南区南浦和1-2-4

事務局執務: 月、水、金 10:00~16:00 ☎・fax: 048-886-7533 http://www.sonnen.net sonnen@bapren.jp

「日本へ導かれた思いと願い」

元西南学院理事長・学長 G.W.パークレー



はじめに、壮年会の皆さまにおかれましては、日頃から西南学院大学神学部で学び、伝道者を目指す神学生のために祈り、その養成のために奨学金を支給していただいていることに心よりお礼を申し上げます。伝道者養成においては、皆さまや日本バプテスト連盟諸教会のご理解とご支援は無くしてはならないものです。

私は、最初は宣教師として、そして2001年からは西南学院大学の教授として38年間西南学院で勤務してきました。その務めを終えるにあたり、「全国壮年会連合ニュース」に執筆させていただくことを大変光栄に思います。

振り返りますと、沢山の思い出と反省点があります。しかし、紙面の都合でその全てを書く事はできませんので、いくつか絞って書かせていただきます。ほとんどが私的な事で恐縮ですが、どうぞお赦してください。

先ず、日本へ導かれた思いですが、簡潔にいきますと、「神さまの導きにより、神学校の恩師をはじめ、母教会の牧師先生、両親等とも相談しながら、祈りの中で日本へ行く決心をした。」ということになります。未熟な（今もそうですが）若い3人家族が日本に渡り、日本語を勉強しながらのスタートでした。当時の宣教団の諸先輩と最初に遭わされた大井町バプテスト教会の方々に全面的に支えていただきました。皆さんの信仰と熱心さに励まされ、「一緒にいる、一緒にする」ことの大切さを学んだことは忘れられません。

1987年の4月に西南学院大学神学部に着任し、同僚の先生方のご指導と励ましに支えられ、キリスト教史分野と大学の必須科目であるキリスト教を担当させていただきました。また、神学部だけではなく、伊都キリスト教会の協力牧師として、連盟及び諸教会の現状と課題にも関わるようになり、日本における宣教活動の課題と、神学教育と実践教育の重要性を認識するようになりました。その後、約30年前から現在のベタニヤ村教会の協力牧師となりました。これらの経験から、牧師養成だけではなく、信徒牧会養成の必要性にも気づかされました。バプテスト教会の従来の「信徒教会形成」は現在の課題の一つであるでしょう。

さて、ご存知の方もおられると思いますが、私には、在職中、学部長、大学宗教部長、学長、院長、理事長等の大任が与えられました。それぞれの役割の中で、教職員と学生に対する宣教活動と、日本バプテスト連盟との関係を忘れずに宣教活動をしてきたつもりです。

今までに学んだことを纏めてみますと、まずは教育の重要性が挙げられます。牧師と信徒の学問的な教育だけではなく、実践教育と「心」（霊性）の教育です。次に、先に述べたように「一緒に」歩むことです。これは、一緒に祈り、一緒に聖書を学び、一緒に宣教活動と教会形成をするということです。宣教師であっても、教員であっても、牧師や協力牧師であっても、そして役職者であっても、一人ではなく共に祈り合い、共に話し合っ、互いに支え合うことがとても重要です。

最後にお願ひがあります。西南学院大学神学部は、壮年会連合の皆さまをはじめ、諸教会の皆さまのご理解とご支援をいただき、これからもより良い伝道者養成教育を提供できるように努力してまいります。壮年会の皆さまにおかれましては、今後も神学部と神学生を、奨学金だけではなく、祈りにおいても支え続けてくださいますようお願いいたします。そして、諸教会におかれましては、牧者になる献身者を育てていただき、神学部へ遣わしてくださいますようお願いいたします。

退職に伴い、現場からは少し離れますが、心は一生離れることはありません。皆様との再会も楽しみにしております。壮年連合の皆さまと日本バプテスト連盟の今後益々のご活躍と、神学部の皆さん、そしてこれから日本でキリストの救いと喜びがありますよう、心からお祈りいたします。38年間、大変お世話になりました。

「私はどのように召命を受け献身したか」

福岡ベタニヤ村教会牧師 田口昭典



1979年12月、西日本新聞社会部の中村記者は「大学生、この半熟世代」という連載記事を書いており、説教をしている私の姿を写真に収め、その記事に添えた。記事の最後に彼の率直な評価が一言書かれていた。私がIBMの技術者を辞めて牧師になる道を選んだことを「一種のドロップアウトである」と書いた。彼は私を「落ちこぼれ」と見た。見事に言い当てている。私の献身は困難からの逃避に映ったのだ。

1966年の12月24日、ギデオン協会から頂いた一冊の新約聖書がきっかけで私は生まれて初めて釧路鶴ヶ岱メノナイト教会の門を潜った。雪が降りしきるクリスマス・イブであった。牧師は棚瀬多喜雄先生。学生時代の4年半、家のすぐそばの教会に時々出入りしていた。

1971年5月、就職のため、私は北海道を後にし、神奈川県大和市に移り住んだ。そして、日本バプテスト連盟の最後の直属開拓伝道所であった相模原伝道所で求道生活を始めた。松田正三先生が牧師であった。北海道の釧路高専を卒業して6畳一間のサラリーマン生活を始めたが、能力不足、慣れない仕事、人間関係、ホームシック等々、得体のしれない不安で私は会社に行けなくなるような苦しい日々を送り、死にたいとさえ思うようになっていた。私は毎日祈った。「何も要りません。高給も自由な休暇も要りません。結婚もできなくていいです。死ぬ時、ただ、いい人生だったと言って死にたい」と。教会は私の唯一の憩いの場であった。

自分の力では自分を支えることが出来ないことを悟り、全てを主に委ねて1971年12月5日、寒い冬の朝、バプテストを受けた。薔薇色に世界が変わることはなかった。しかし、私は、「自分はイエス様のものになった」と確信した。「すべての道で主を認めよ、そうすれば主はあなたの道をまっすぐにされる」（箴言3：6）の御言葉が私を励まし、慰めてくれた。休まず、礼拝と祈禱会に出席した。やがて私は自信を取り戻し、仕事が面白くなり、あの「祈り」を忘れた。

1974年の12月、クリスマスにマタイ2：1-12が読まれた。この時、幼児イエス様を礼拝した東の国の占星術の学者たちは、ヘロデの元に帰るなどのみ告げを受け、「他の道を通って自分の国へ帰って行った」。「他の道」という御言葉に衝撃を受けた。私の祈りに応えて神が備えた「他の道」を歩まず、ヘロデのところに帰っている自分に気づかされた。神は私にどんな「他の道」を備えておられるのか？思い巡らす日々が続いた。1975年のゴールデンウィーク、私はクリスチャン新聞が募集した韓国教会訪問のツアーに参加し、他の道を探した。ツアーは「韓国教会の成長に学ぶ」というものであった。前年、ソウルの汝矣島広場でピリー・グラハムによる大伝道集会所が開かれおり、1万人のバプテスト式が行われたと聞いていた。行く先々で「献身」について学んだ。民族総福音化の情熱に燃える青年たちと交流し、チャレンジを受けた。「将来主の導きがあれば献身したい」と最後の証会で話した。クリスチャン新聞日曜版に「献身を決意——田口昭典」と載って、大いに戸惑った。また、神奈川連合の青年会で参加した湯河原の城山学園でのワークキャンプ、奉仕を終えて帰る時、園長の金子益雄先生が「田口さん、献身してもいいよ」と言われた。心が落ち着かず、翌日先生を学園に訪ね「主の召命と献身」の意味を教わり、お祈りしていただいた。5年働いた会社を退職し、1976年3月、神学部入学試験の前日、福岡空港に降りた。準備のないまま受けた試験は散々だった。その晩、私は受験票の裏に、その時の心境を記した。「神様、準備不足で試験は不合格になると思います。しかし、私が牧師になることをあなたが望み、私を召してください、献身へと導いてくださっていることを確信しています。私は西南がダメだったら、次の神学校を受験します。あきらめません。」と。

神は私を牧師になるよう様々な状況や機会、人との出会いを通して召してくださいました。今振り返ると、私の献身も召命も相当問題の多いものであった。しかし、主は、私の祈りへの答えとして、私を召してくださいました。最高の人生だったと言って主のみ許に帰るために。